書評

高橋伸夫『党と農民－中国農民革命の再検討－』

研文出版（2006.12）

丸田孝志

この30年来の中国近代史研究の発展は、中国共産党（中共）の革命史観を完全に過去のものとし、国家・国民統合や社会・経済・政治の近代化に関わる豊かな議論を蓄積してきたものの、中共の革命運動の問題を中国近代史の全体像に位置づけることに十分に成功しているとは言い難い。中共史研究は、多様化する諸研究領域との対話の中で、近代中国における革命の問題を再定置する任務を負っている。著者は、中共の対外政策の問題から研究を開始し、政治学研究の問題関心から、中共史研究に関する積極的な問題提起をされてきた。本書は、著者が十年来行ってきたソビエト革命期の中共組織とその革命運動に関する実証研究をまとめ、その成果に基づいて、中共の農村革命の研究視角に関する方法上の問題提起を行ったものである。

本書の構成は以下のとおりである。

序文／第一部　革命根拠地における党と農民 ― 鄂豫皖根拠地、一九三一年～一九三四年／第二部 党、紅軍、農民 ― 閩西根拠地、一九二九年～一九三四年／補論一　中国共産党と農民革命 ― 研究状況と課題／補論二　四つの可能な中国共産党史 ― 党史研究上の諸戦略

序文において本書の視角と方法が述べられた後、第一部と第二部では、ソビエト革命期の鄂豫皖根拠地、閩西根拠地における中共党組織と革命運動の実態が、近年公刊された当時の党内文書によって明らかにされている。基層の中共組織は、しばしば既存の社会関係を丸のみする形で党員を獲得してお

り、そこには地縁・血縁・会党組織などの社会関係が浸透し、地主・富農・流氓・土匪などが運動の方向を投機的に左右していた。大衆の入党動機は、生命の安全の確保や私的な利害追求を中心としており、党の綱領や政策は党員に理解されていなかった。入党・離脱・復帰が容易で、党員の流動性が激しいという状況からも、社会の様々な利害関係の中に浮遊する中共組織のあり方が垣間見える。

党への積極的な支持は、階級関係からではなく、主に世代間・性別間の対立から引き起こされ、青少年・女性が顕著な役割を果たした。しかし、党がこれらの人々の行動を組織・統制できたわけでもない。交通・コミュニケーション手段の未発達と国民党の包囲・攻撃により、組織間の意思疎通は滞りがちで、資金部不足も手伝って、上部の組織命令は伝達すら困難であった。党員が独占していた政権、大衆組織にも同様の状況がみられ、軍隊は大衆的基盤を持たず、逃亡が繰り返され、行動様式は匪賊に類似していたという。県級より上位の党組織が階級政党として一応の実態を保っていたのに対し、基層組織はその反対物ともいえる散漫な大衆政党的組織であり、地域の独自性が組織の生存と革命の遂行に重要な意義をもっていた。以上のように、著者は革命史研究の「暗黙の前提」であった「党と農民」のイメージを正面から覆し、中共の政治意図にそぐわない社会の独自性、地域ごとの革命の多様性、伝統的農村社会の根強い連続性を強調する形で、中共と根拠地の姿を描き出している。

以上のようなソビエト革命期の状況が、1949年の中共の全国政権掌握という帰結とどのように結びつくのか、著者は、中共の勝利の原因を、抗日戦争期の党組織の強化に見出すよりも、むしろ散漫な組織が備える特徴に重点をおいて展望している。すなわち、中共が根拠地の大衆に継続的に安全保障と私的利益を提供することに成功し、党の支配の安定しかけた時点と場所において、投機的な大衆が押し寄せ、雪だるま式に組織が膨張し、動員力が高まるというイメージである。それ故、革命の過程には依然として不確実性が伴い、変革の結果には古い社会の痕跡が留まることとなる。

以上のような研究成果と展望を踏まえ、補論一では中共の農村革命に関する近年の研究動向と認識の到達点が示される。均質・単一的な農村革命像は、

地域ごとの多様な性格の運動に分解され、革命そのものについても伝統との連続性に関心が向けられるようになった。中共の戦略的・戦術的な柔軟性がこれらの多様性に対応したようにもみえるが、中共の運動は、硬直した原理主義的政策が統制の効かない混乱を招き、穏健な政策へと転換するというサイクルを構成しており、その過程は中共自身にも予測不可能であった。

農民の中共への支持は自明のものではなく、革命と特定の階級の自然な結びつきも前提とはされない。農村の共同体的紐帯を強調するモラル・エコノミーや、打算的農民像を提示するポリティカル・エコノミーの理論によっても、農民の革命参加は十分には説明できず、伝統社会の文化・価値観は、様々な文脈において、破壊されることもあれば、強化されることもある。このように、近年の研究動向は、革命の構造的把握やその必然性よりも不確実性を基調とするものとなっており、その傾向は、本論の論点に符合している。

このような動向を踏まえて、著者は今後の課題を以下のように提示する。すなわち、今後の研究は、農民の主体的戦略において中共との関係を考察し、中共による利益配分と諸階級・諸集団の党への支持の関係を動態的に分析する必要がある。その際、基層の党員・党組織に関する社会学的・文化人類学的分析も考慮されるべきである。また、「単一の革命」という言説が担っていた作用に着目し、革命の言説やシンボルの機能を分析する必要もある。これらの分析と併せて中共を勝利へ導いた政治・軍事戦略の組み合わせを考察し、最終的には、革命を中国固有の歴史の文脈に位置づけ直す作業を終着点とすべきである。

かくして、伝統社会からの断絶と構造的要因を強調する古い革命のイメージは、伝統社会の諸要素、行為者の主体的意図も重要な変数として関わる複雑な過程として再認識される。著者は、このような問題状況から中共史研究の戦略的方向性をより意識的に模索する意図をもって、補論二において、「連続―断絶」、「構造―行為者」という二つの対立軸から成る四象限の分析枠組みを提示し、それぞれの指向する歴史解釈の図式とその問題点を提示する。その上で、大衆の主体性や地域の多様性に注目して多様な主題を見出すことのできる「断絶―行為者モデル」の、現段階での一応の有効性が確認される。ただし、著者が繰り返し指摘するように、意義のある実証研究や包括的な革

命像の構築には、上の四つの視点の複合的採用ないし相互間の絶えざる往復作業が必要である。著者は、敢えて抽象度の高い二項対立的整理を提示することで、パラダイム転換のための尖鋭な切り口を示そうとしたのである。

評者は、著者が示した中共基層組織の状況が、会党・宗教結社の組織原理に通じる特徴を持ち、中国史における政治権力と大衆動員の問題を考える上で示唆に富むこと、抗日戦争期・内戦期の中共組織の発展形態にソビエト革命期との共通点がみられることなどついて、旧稿で論じておいた[1]。ここでは、これらにも関連しつつ、気づいた点を指摘したい。

まず、散漫な党組織の特徴と中共の全国政権掌握との関係について。評者が抗日戦争期・内戦期の前線の根拠地について行った考察では、内戦期に至るも、状況に応じて投機的な大衆を大量に巻き込む散漫な組織の状況が確認できるとともに、長期的な闘争によって経験を積んだ県・区級の幹部が一定の層を形成し、これらが整風運動・整党運動によって忠誠心を高め、組織の力が徐々に高まっていく状況が確認できた[2]。状況に応じて組織が伸縮する散漫性（柔軟性）と、強化された組織力という双方の力を備えていたことが、中共の勝利に寄与したのではないかと評者は考える。土地改革がソビエト革命期のように骨抜きにされずに実行され、社会変革が進展していく状況を、主に散漫な組織の膨張過程として描くことは不十分ではないだろうか。

それでは、強化に向かう党の組織力と、大衆による党組織の「勝手な包摂」との関係は、どのように展望すべきであろうか。組織性の弱い社会が提供できない保護機能を、党組織が代替している状況が「勝手な包摂」の内実であるとすれば、大衆は、党を自己目的に利用する一方で、権力に依存して自己の安全や発展を図っていることにもなる。そのため、特に秩序の混乱期には、権力による社会への干渉は容易になるであろう。また、組織性が弱い社会においては、規範よりも実力による支配が優勢であり、中共が制圧した地域で民衆を立ち上がらせた場合、運動も多分に暴力的な様相を帯びる。秩序の混乱の中、軍事的に圧倒的な位置を占めた政治権力は、弱い秩序を更に崩壊させる形で、変革の引き金を引くことが可能となったのではないだろうか。大衆運動において、「極左的現象」の出現を中共自身が統制できず、しばしば革命の過程に「不確実さがともなう」ようにみえることは、このような社会の

本来的な秩序維持機能の弱さに対応していよう。そして、既成の秩序を破壊した後、社会変革を徹底させていくのは、社会が新たに獲得した凝集力というよりも、これを代替して確実に力を増していく党組織の凝集力であると考えることができる。

この他、本書の提起した問題の一部は、国民党組織との比較によって展望できるのではないかと考える。大衆の多様な個別利害が浸透する組織の状況と、組織の農村への浸透が表裏一体のものとすれば、国民党による農村統治の成果や失敗は、中共との比較においてどのように描くことが可能であろうか。また、中央レベルでの派閥抗争を統制できず、基層社会への浸透も不十分なまま、憲政実施の任務を担って権力の民主化の過程を進めた国民党権力と、整風運動などによって幹部の忠誠心と服従を獲得していく中共とを比較すれば、双方の組織力の差異、権力の志向性とその特質がより明確になるであろう。

著者は、中共党史研究の分析視角における問題点を、比較政治学ないし歴史社会学の普遍的問題意識において整理し提示された。補論二で示された四象限の解釈モデルは、意識的な研究戦略の構築のために、深い示唆を与えるものであるが、評者にとっては、「連続」の問題の解釈にやや物足りなさを感じる。本論において、「連続」は伝統社会の諸要素の問題として、重要な論点を構成しているが、補論二の解釈モデルでは、フランス革命における絶対王政（長期的なブルジョワ的変革の主体）と革命派の関係を下敷きにして、国民党・中共の権力闘争に関する歴史解釈の再整理を行ったため、「連続」は、主に中共の革命と対峙するブルジョワ的変革の緩慢な過程として捉えられ、「連続」に込められるべき伝統社会の諸要素の問題が、十分に考察の視野に入っていない。

伝統社会の諸要素が、革命と意識的ないし意図せぬ共鳴を引き起こしていく状況、伝統社会の脈絡に沿った中国固有の発展のあり方や中国の政治と社会の個性・特徴などに解釈の重点が置かれれば、「連続」の象限に属するモデルには、更に積極的な解釈が与えられたのではないかと考える。これらは、国民党と中共の、社会や伝統に対する関わり方の相違や共通性、およびそのことがもたらす社会把握の程度や権力闘争の帰趨とも関係する問題である。

このような視点から連続モデルを解釈すれば、中共は、著者が示したブルジョワ的変革の意図せぬ継承者、あるいは喜劇的な権力簒奪者としてではなく、国民党よりも伝統社会に適合的な体質や志向性を持つことで、「革命」に勝利した成功者として描かれることとなる。この場合、国民党は、中共よりも近代的な性格を持つが故に、「革命」に敗北するという逆説的な立場におかれるであろう。

いずれにしても、「連続」を正面に据えた議論を行う場合、「伝統社会」や「伝統文化」などの内実の検討が前提となるが（当然、「断絶」を掲げた革命史観の「古い伝統社会」像とは異なる「伝統」の在り方を提示する必要も生じる）、本書が「連続」面の重要性を強調しながら、その点を十分に示されていないことが、これらの問題の根幹にあるのではないかと感じる。

以上の課題は、もちろん評者自身にも課せられたものである。最後に、個別性に埋没し、理論化・抽象化に消極的な歴史学研究の問題点を指摘し、研究の方向性に関する、大胆で示唆に富む問題提起を行われた本書の意義を改めて強調しておきたい（238 頁+iv，3800 円+税）。

註

1　丸田孝志「太行・太岳根拠地の追悼のセレモニーと土地改革期の民俗」『近きに在りて』第 49 号,2006 年。同「抗日戦争期・内戦期における冀魯豫区の中国共産党組織」『史学研究』第 259 号,2008 年。

2　前掲丸田「抗日戦争期・内戦期における冀魯豫区の中国共産党組織」。